平成 29（2017）年度　奨励研究

学科の学びを活用する能動的学修の展開

～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

事業報告書

札幌国際大学

目　次

Ⅰ　研究概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

1　研究の目的
2　研究組織
3　推進体制
4　調査研究スケジュール

Ⅱ　活動概況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

1　フィールドワーク「美利河地区の現状及び問題の把握」　(7 月 16 日～17 日)
2　テーマ別協議「課題と解決方策について」　(9 月 16 日～17 日)
3　研究成果の発表「企画提案書の作成、プレゼン準備・発表」　(11 月 3 日～4 日)

Ⅲ　成果と課題　～調査研究を振り返って～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

1　プロジェクトの成果と課題　スポーツビジネス学科　佐久間　章

2　学科の学びと能動的学修の展開

(1) 交流チーム　観光ビジネス学科　丹治和典、千葉里美

(2) 健康チーム　スポーツ指導学科　新井　貢、本多理紗

(3) 歴史チーム　現代文化学科　坂梨夏代
縄文世界遺産研究室　越田賢一郎

Ⅰ　研 究 概 要

1　研究の目的

本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町は、肥沃な土壌や気候の恩恵を受け農業が盛んで日本一の「今金男爵」をはじめ多くの農産物を生産している。また、「日本一のきれいな川」として、その清らかさを誇っている後志利別川などの美しい自然環境や、ピリカ遺跡などの歴史的に価値ある場所も数多く残されている。しかし、同町の美利河地区は、奥ピリカ温泉やスキー場の閉鎖など、地域資源を十分に活用することができず、地域の再生が重要な課題となっている。そこで、本プロジェクトは、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと協議し、提案を行うことを目的とする。学科の学習を生かすことができるように、キーワードとリンクする学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる。こうした活動により、学内での学びを生かした学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）展開の方法についての資料を得ることを目的とする。

2　研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

（代表）　スポーツ人間学部スポーツビジネス学科　教授 佐久間　章
観光学部観光ビジネス学科　教授　丹治　和典
観光学部観光ビジネス学科　准教授　千葉　里美
スポーツ人間学部スポーツ指導学科　准教授　新井　貢
スポーツ人間学部スポーツ指導学科　講師　本多　理紗
人文学部現代文化学科　准教授　坂梨　夏代
縄文世界遺産研究室　室長　越田　賢一郎

3　推進体制

本研究は、札幌国際大学と今金町の共同研究であることから、それぞれ以下の推進体制により、研究を進める。

《　札幌国際大学　》

■健康チーム（スポーツ指導学科学生　3名）　担当教員　新井貢、本多理紗
・高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する

■歴史チーム（現代文化学科学生　3名）　担当教員　坂梨夏代、越田賢一郎
・美利河地区が有する歴史・文化的な資源を、保護・活用および伝承するとともに、今金町における歴史文化の発信を考える。

■観光チーム（観光ビジネス学科学生　4名）　担当教員　丹治和典、千葉里美
・北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致

および交流人口を増やすための今金町の玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。

□調整チーム（スポーツビジネス学科学生　4名）　担当教員 佐久間章

・チーム間の連絡調整及び活動の記録等。

《　今金町　》　まちづくり推進課　課長　　寺崎康史

課長補佐　早坂　靖

企画政策グループ　主事　植村亜耶

地域おこし協力隊　木元　希

4 調査研究スケジュール

3月下旬　　次年度プロジェクトについての協議　（今金町）

6月(清麗祭)　合同会議　※実施計画について　（大学）

第1回合同フィールドワーク

7月 16-17 日　　第1回 美利河地区の現状及び問題の把握　（今金町）

・テーマ別チーム毎に美利河在住者のガイドによりＦＷ

※テーマ別チーム

【健康】　スポーツ指導学科

【歴史】　現代文化学科

【観光】　観光ビジネス学科

今金中学校の生徒が、各チームに2名ずつ入る

【宿泊：クアハウスピリカ】

第2回合同フィールドワーク

9月 16-17 日　　第2回　課題と解決方策について協議　（今金町）

・テーマ別にグループワーク(提案骨子の作成)

【宿泊：学生は東部ふれあいホール】

※学生は、第3回に向けて大学において、適宜チーム会議を開催し提案書及び発表データ等の作成を行う。

活動成果報告会

11月 3-4 日　　第3回　提案書の作成、プレゼン準備、発表会　（今金町）

「町民文化祭」にて、活動成果報告会を開催。

12月 7 日　　合同会議　※事業の成果と課題について　（大学）

Ⅱ　活動状況

1　フィールドワーク「美利河地区の現状及び問題の把握」　(7 月 16 日～17 日)

(1) 日　程

時間	1日目 (7/16日)	2日目 (7/17月)
7:00	7時45分集合　1号館前 8時00分出発	朝食・チェックアウト準備
8:00		8時30分～9時30分　チーム別ミーティング チーム別フィールドワーク先について
9:00	大学～今金町(高速道路)	チーム別フィールドワーク (9時30分～11時30分)
10:00	※昼食は持参し、車中で取る	
11:00		
12:00	車内研修①　地形、地質、地名 車内研修②　農業、特産品、名所	FWのまとめ・昼食(美利河交流センター)
13:00	全体会　(美利河交流センター) プロジェクト概要の説明 アイイスブレイク	13時　今金町出発
14:00		
15:00	合同フィールドワーク① ピリカ旧石器文化館 ↓ 美利河ダム	※大学到着　17時予定
16:00	↓ 奥美利河温泉 ↓	
17:00	クアプラザピリカ	
18:00	交流夕食会(レストハウス) (17時30分～19時)	
19:00		
20:00	チーム別ミーティング 本日のFWのまとめ等	
21:00		
宿 泊	クアプラザピリカ	

(2) 活動プログラム

第 1 日（7 月 16 日）

■全体会

■アイスブレイク

■合同フィールドワーク

・ピリカ旧石器文化館

・美利河ダム

・美利河ダム内へ

・魚道観察

・奥美利河温泉跡

第 2 日（7 月 17 日）

・健康チームフィールドワーク

・交流チームフィールドワーク

・歴史チームフィールドワーク

・参加者にインタビューする調整チーム

2　テーマ別協議「課題と解決方策について」　(9 月 16 日～17 日)

(1) 日　程

時間	1日目 (9/16日)	2日目 (9/17月)
7:00	7時45分集合　1号館前 8時00分出発	朝食準備･朝食
8:00		協議の準備等
9:00	大学～今金町 ※昼食は持参し、車中で取る	
10:00		※チーム別協議② (9時00分～11時30分)
11:00		
12:00	東部ふれあいホール着	まとめとふりかえり･昼食
13:00	全体会 日程および協議事項についての確認	13時　今金町出発
14:00	※チーム別協議① (13時00分～17時00分)	
15:00	(調整チームは、夕食の調理)	※大学到着　17時予定
16:00		
17:00		
18:00	交流夕食会 (17時30分～19時00分)	
19:00		
20:00	入浴(あったからんど)	
21:00	チーム別ミーティング 本日のFWのまとめ等	
宿泊先	東部ふれあいホール	

(2) 活動プログラム

第 1 日 (9 月 16 日)

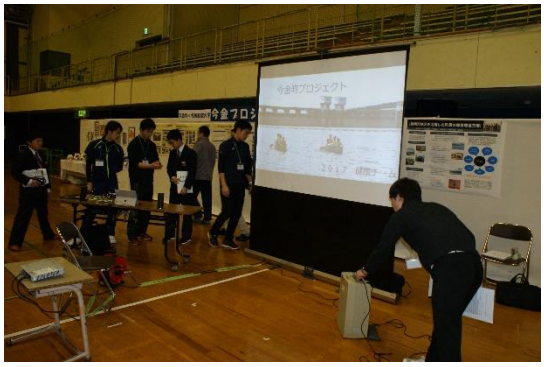
３　研究成果の発表「企画提案書の作成、プレゼン準備・発表」　(11 月 3 日～4 日)

(1) 日　程

	1日目 (11/3 金)	2日目 (11/4 土)
7:00	7時45分集合　1号館前 8時00分出発	朝食準備･朝食
8:00		協議の準備等
9:00	大学～今金町 ※車中で昼食。	体育館へ徒歩移動。 中学生と合流、発表準備。
10:00		＊成果報告会　10時～11時
11:00		東部ふれあいホールへ徒歩移動。 まとめとふりかえり 昼食(弁当)
12:00	東部ふれあいホール着	
13:00	全体会 日程等の確認	13時　今金町出発
14:00	※チーム別打ち合わせ･発表リハーサル等 (13時00分～16時30分)	
15:00		※大学到着　17時予定
16:00		
17:00		
18:00	交流夕食会 (17時30分～18時30分) ※18時30分　発表会場の下見。 中学生は、19時帰宅。	
19:00	20時　入浴(あったからんど)	
20:00	21時　チーム別ミーティング等	
21:00		
宿泊先	東部ふれあいホール	

(2) 活動プログラム

東部ふれあいホールにて、発表のリハーサル



会場設営及び発表についての最終打ち合わせ

当日は、NHK テレビが取材に来ました。→

交流チームの発表と参加者からの質問

歴史チームの発表と参加者からの質問

健康チームの発表と参加者からの質問

講評　美利河自治会　宗像さん

講評　今金町　中島副町長

NHK の取材を受ける学生

中学生に送られた学生からメッセージ

※今金町総合文化祭パンフレットに掲載された案内記事

今金プロジェクト2017（今金町×札幌国際大学）

産業、文化、まちづくり、学術の分野等での協力を目的に、「地域連携事業に関する協定」を締結（2012.10.16）

◆プロジェクトの軌跡　2015～2016

◆プロジェクト 2017 の活動をポスターでご紹介いたします◆

今金町の玄関口である美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、
次代を担う今金町の中学生と大学生が協議し、同地区の魅力を高める方策を提案します。

健康

高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を提案します。
中学生：山北智哉君（3年）・木島直人君（2年）

交流

観光誘致・交流人口を増やすため美利河地区における観光振興ツールを提案します。
中学生：西田知樹君（3年）・岩橋龍佑君（3年）

歴史

美利河地区の歴史文化の発信方策について提案します。
中学生：山崎騎士君（3年）・湯元来輝君（2年）

今金町×札幌国際大学
今金プロジェクト 2017　活動成果報告会

～〝美利河〟私たちの提案～

11 月 4 日（土）10 時～11 時
今金町体育館

中学生の思いを大学生と一緒に“カタチ”にした活動成果を発表します。
皆さんのお越しを心よりお待ちしております。

※当日の配布資料

今金町×札幌国際大学

今金プロジェクト2017　活動成果報告会

～〝美利河〟私たちの提案～

11月4日（土）10時～

1　開会
2　報告会趣旨等説明
3　プロジェクト概要報告（調整チーム）
4　チーム別活動成果報告
　（1）交流チーム
　（2）歴史チーム
　（3）健康チーム
5　講評等
6　閉会

交流チーム

今金中学校	3年	西田　知樹
今金中学校	3年	岩橋　龍佑
観光ビジネス学科	3年	田中　智也
観光ビジネス学科	3年	石塚　陽太
観光ビジネス学科	3年	馬場　晴菜
観光ビジネス学科	3年	チェ　ユビン

歴史チーム

今金中学校	3年	山崎　騎士
今金中学校	2年	湯元　来輝
現代文化学科	2年	榊原　愛歌
現代文化学科	3年	佐藤　瑞希
現代文化学科	3年	豊島　弥桜

健康チーム

今金中学校	3年	山北　智哉
今金中学校	2年	木島　直人
スポーツ指導学科	3年	関根　大智
スポーツ指導学科	3年	安藤　　栞
スポーツ指導学科	3年	春名　秀一

調整チーム

スポーツビジネス学科	2年	伊達　陸都
スポーツビジネス学科	2年	土屋　雄生
スポーツビジネス学科	2年	奥田　真矢
スポーツビジネス学科	2年	木口　秀将

Ⅲ　成果と課題　～調査研究を振り返って～

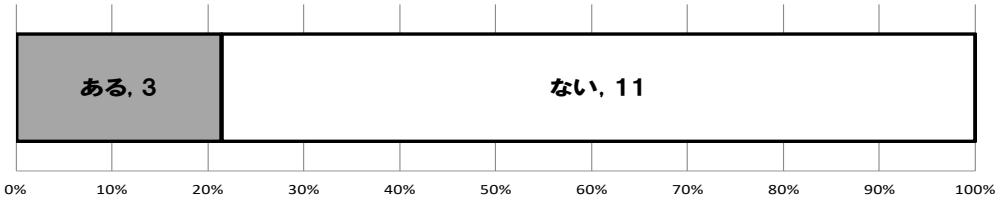
1　プロジェクトの成果と課題

本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町は、肥沃な土壌や気候の恩恵を受け農業が盛んで日本一の「今金男爵」をはじめ多くの農産物を生産している。また、「日本一のきれいな川」として、その清らかさを誇っている後志利別川などの美しい自然環境や、ピリカ遺跡などの歴史的に価値ある場所も数多く残されている。しかし、同町の美利河地区は、奥ピリカ温泉やスキー場の閉鎖など、地域資源を十分に活用することができず、地域の活性化が課題となっている。

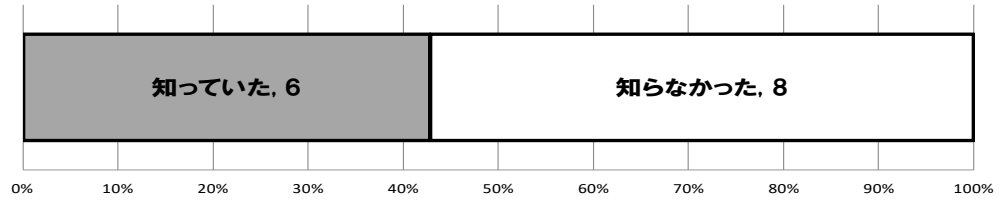
そこで、本プロジェクトは、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと本学学生が協議し、提案を行うことを目的として実施した。学科の学びを生かすことができるように、キーワードと関連する学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる（表-1)。こうした活動により、学生が日ごろの学内での学びを生かした学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）展開の方法についての資料を得ることを目的として 1 年間にわたり取り組みを展開した。なお、参加学生のうち今金町への訪問経験があるのは、わずか 3 名であり、残りの 11 名は訪問経験のない学生であった（図-1、図-2)。

（表-1）チームの役割と学生の所属学科

チーム	健康チーム	歴史チーム	交流チーム	調整チーム
役割	高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する。	美利河地区が有する歴史・文化的な資源を、保護・活用および伝承するとともに、今金町における歴史文化の発信を考える。	北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致および交流人口を増やすための今金町の玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。	チーム間の連絡調整及び活動の記録を整理する。プロジェクト全体の運営及びスケジュール管理する。
学生	スポーツ指導学科　3名	現代文化学科　3名	観光ビジネス学科　4名	スポーツビジネス学科　4名



（図-1）今金町への訪問経験の有無



（図-2）今金町の認知

本プロジェクトでは、学生の意識変容等を把握するため、各回の活動前後にできうる限りアンケートやレポート等を実施してきた。こうした調査結果から特徴的なデータを中心に、学生の意識等の変容を概観する。

(1) 社会人基礎力の変化

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力（12 の能力要素）から構成され、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が 2006 年から提唱している（図-3）。

（図-3）社会人基礎力　出典:経済産業省 HP　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/

（表-2）社会人基礎力　3 つの能力と 12 の能力要素

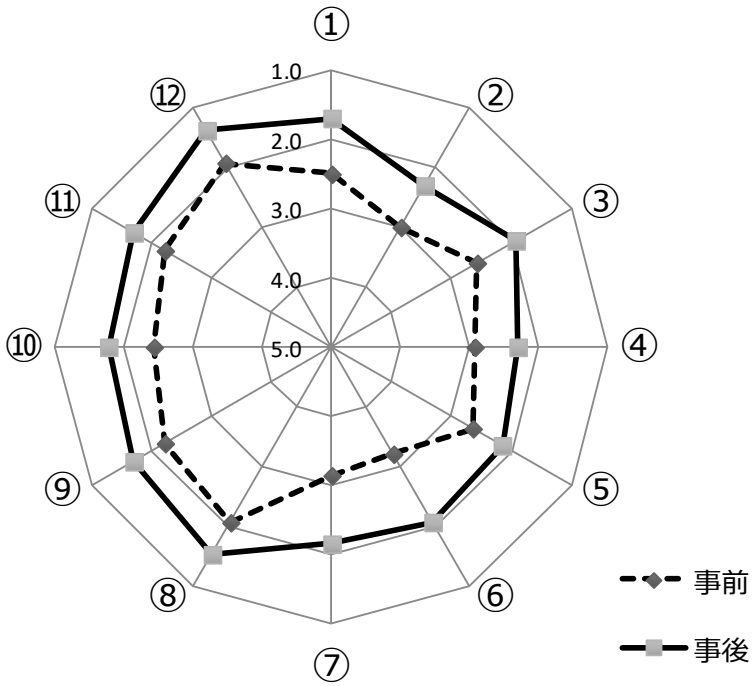
能力	能力要素	社　会　人　基　礎　力	NO
前に踏み出す力（アクション） ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～	主体性	物事に進んで取り組む力	①
	働きかける力	他人に働きかけ巻き込む力	②
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	③
考え抜く力（シンキング） ～疑問を持ち、考え抜く力～	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	④
	計画力	課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力	⑤
	創造力	新しい価値を生み出す力	⑥
チームで働く力（チームワーク） ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	⑦
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	⑧
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	⑨
	情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	⑩
	ストレス コントロール力	ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力	⑪
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	⑫

本プロジェクトの参加学生に対して、社会人基礎力の変化を確認するため、12 の能力要素(表－２)について、段階評定法(5 件法)によって事前(7 月 14 日)と事後(11 月 4 日)に 2 回調査を実施した。

能力要素について事前と事後の変化は、12 のすべての要素で増加しており、要素全体の平均は、0.7 ポイントの増加であった。要素別にみると、「⑥新しい価値を生み出す力」が 1.1 ポイント、「⑦自分の意見をわかりやすく伝える力」が 1.0 ポイントとなっており、大きく増加した能力要素である(表-3、図-4)。

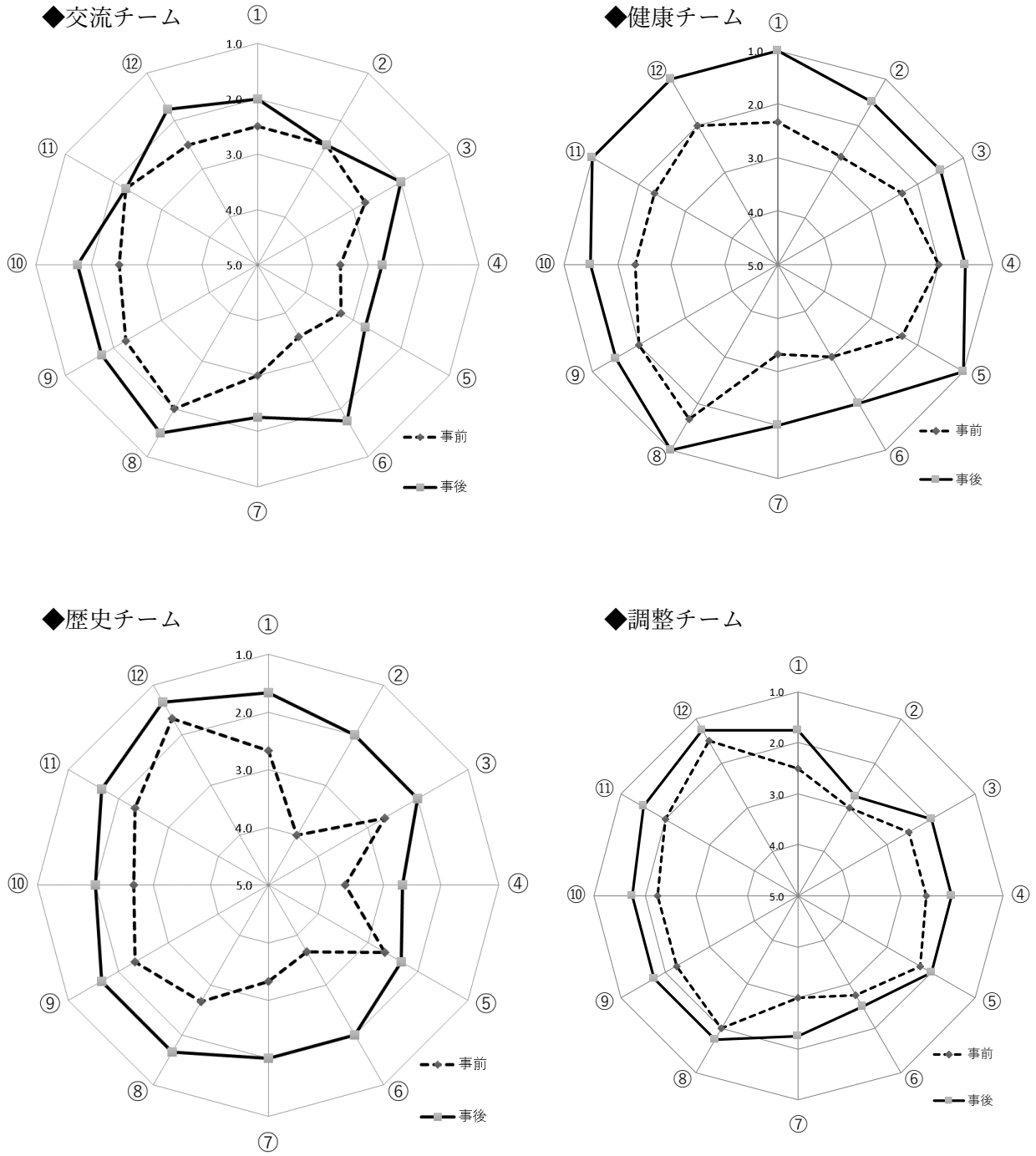
(表-3) 社会人基礎力(12 の能力要素)の変化

NO	社 会 人 基 礎 力	事前(A)	事後(B)	増減(A-B)
①	物事に進んで取り組む力	*2.5*	*1.7*	*0.8*
②	他人に働きかけ巻き込む力	*3.0*	*2.3*	*0.7*
③	目的を設定し確実に行動する力	*2.6*	*1.9*	*0.6*
④	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	*2.9*	*2.3*	*0.6*
⑤	課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力	*2.6*	*2.2*	*0.5*
⑥	新しい価値を生み出す力	*3.2*	*2.1*	*1.1*
⑦	自分の意見をわかりやすく伝える力	*3.1*	*2.2*	*1.0*
⑧	相手の意見を丁寧に聴く力	*2.1*	*1.5*	*0.5*
⑨	意見の違いや立場の違いを理解する力	*2.2*	*1.7*	*0.5*
⑩	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	*2.4*	*1.8*	*0.7*
⑪	ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力	*2.2*	*1.7*	*0.5*
⑫	社会のルールや人との約束を守る力	*1.9*	*1.4*	*0.5*



(図-4) 社会人基礎力(12 の能力要素)の変化

チーム別にみると、変化が 0.9 ポイントで最も大きいのが健康チームと歴史チームであり、次いで交流チームの 0.6 ポイント、調整チームの 0.5 ポイントとなっている。能力要素別にみると、歴史チームの「②他人に働きかけ巻き込む力」が 2.0 ポイントで最も大きく変化している。(図-5、表-4)



(図-5) チーム別社会人基礎力(12 の能力要素)の変化

（表-4）チーム別社会人基礎力(12 の能力要素)の変化

NO	社会人基礎力	交流チーム		健康チーム		歴史チーム		調整チーム	
		事前(A)	事後(B)	事前(A)	事後(B)	事前(A)	事後(B)	事前(A)	事後(B)
①	物事に進んで取り組む力	2.5	2.0	2.3	1.0	2.7	1.7	2.5	1.8
②	他人に働きかけ巻き込む力	2.5	2.5	2.7	1.5	4.0	2.0	3.0	2.8
③	目的を設定し確実に行動する力	2.8	2.0	2.3	1.5	2.7	2.0	2.5	2.0
④	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	3.5	2.8	2.0	1.5	3.7	2.7	2.5	2.0
⑤	課題の解決に向けてプロセスを明らかにして準備する力	3.3	2.8	2.3	1.0	2.7	2.3	2.3	2.0
⑥	新しい価値を生み出す力	3.5	1.8	3.0	2.0	3.7	2.0	2.8	2.5
⑦	自分の意見をわかりやすく伝える力	3.0	2.3	3.3	2.0	3.3	2.0	3.0	2.3
⑧	相手の意見を丁寧に聴く力	2.0	1.5	1.7	1.0	2.7	1.7	2.0	1.8
⑨	意見の違いや立場の違いを理解する力	2.3	1.8	2.0	1.5	2.3	1.7	2.3	1.8
⑩	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	2.5	1.8	2.3	1.5	2.7	2.0	2.3	1.8
⑪	ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する力	2.3	2.3	2.3	1.0	2.3	1.7	2.0	1.5
⑫	社会のルールや人との約束を守る力	2.5	1.8	2.0	1.0	1.7	1.3	1.5	1.3

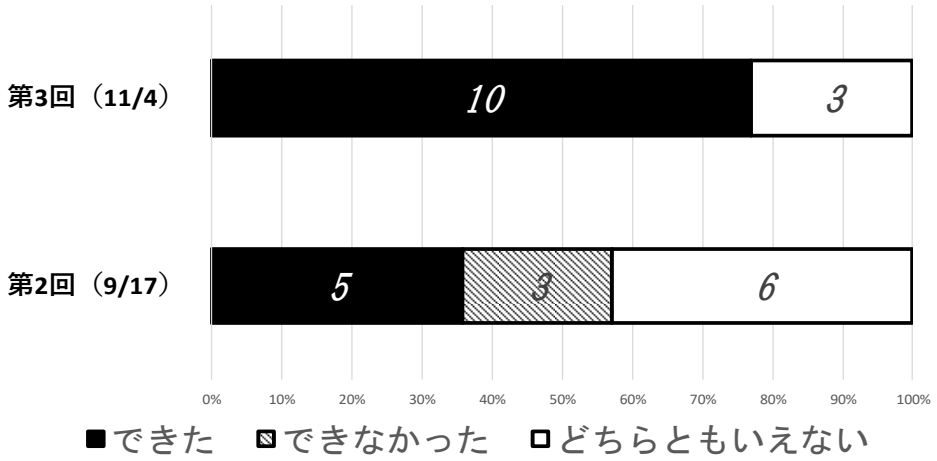
(2) 大学での学びの活用

大学での学びの活用状況について、9 月 17 日の第 2 回と 11 月 4 日の第 3 回において、参加学生へ調査を実施した。第 2 回では、活用することができたという回答が 36%であるのに対して、第 3 回では、77%となっている（表-5、図-6)。また、活かすことのできた内容については、プロジェクト演習をはじめとする演習科目におけるグループでのワークやディスカッション、パワーポイントの作成などが挙げられていた。また、科目名としては、前出の「プロジェクト演習」や「観光事業論」「スポーツ社会学」「地域社会と健康」「レクリェーション実技」「基礎演習」が挙げられていた（表-7)。

（表-5）大学での学びの活用の有無

大学の学びを活かすことができたか

	第2回 （9/17） N=14		第3回 （11/4） N=13	
1 できた	5	36%	10	77%
2 できなかった	3	21%	0	0%
3 どちらともいえない	6	43%	3	23%



（図-6）大学での学びの活用の有無

（表-7）大学での学びを活用することができた内容

第２回（9/17）

○ポスター作成において、講義で学んでいたことを活かすことができた。
○プロジェクト演習で学んだ、多くの人の意見を聞いてまとめること。
○プロジェクト演習での「チームとして動く」という考えをもとに、チームのメンバーと協力して行うことができ、活かすことができた。
○「健康」という概念・意義を踏まえて、町民の人々に伝えられた。
○「プロジェクト演習Ⅰ」での話し合いや意見交換の方法を活かせた。
○「観光事業論」「3 年演習（基礎)」で、観光の知識を活かせた。

第３回（11/4）

○地域と健康との関係や健康の捉え方、考え方などを、スポーツ社会学や地域社会と健康などの科目で習った内容が活かせた。レクリエーション実技などで身につけた、実践力が活かせた。
○プレゼンテーションを行う際のパワーポイントの中に、大学で学んだアカデミックな部分の研究論文を入れることができた。
○「観光」に対する必要性を中学生、町民の方々に熱弁できたと思っている。
○基礎演習やプロジェクト演習のパワーポイントの作成など。
○基礎演習やプロジェクト演習におけるグループディスカッションの能力。
○パワーポイントの作成、発表、グループワークなど、授業で学んだことが実践できた。
○専門で学んでいる歴史や、ゼミでまず地元と人を知り活動することが大事だと学んだところ。

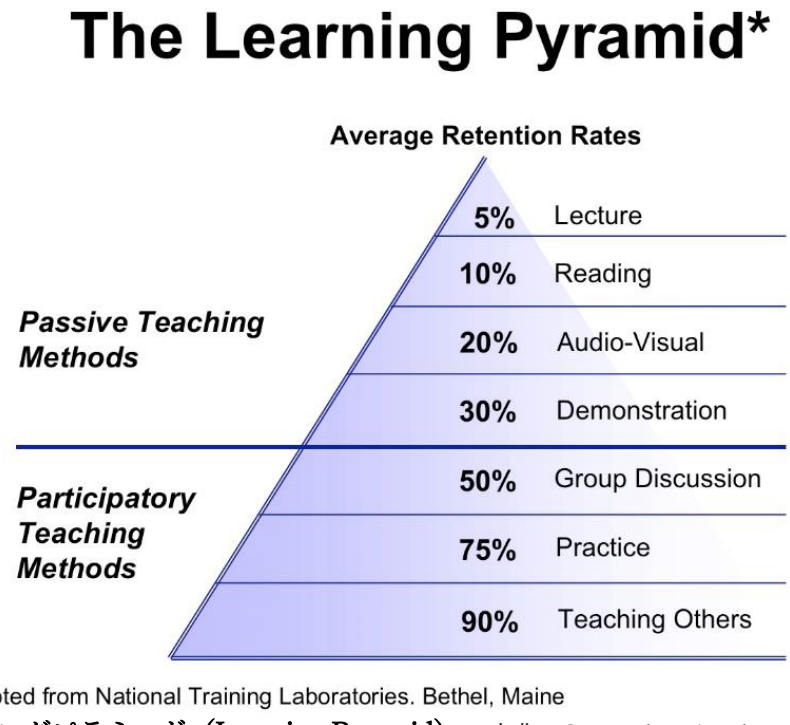
(3) プロジェクトの成果と課題

前述の学生調査からも、一定程度の大学での学びが活用されていることを確認することができた。また、社会人基礎力の能力要素についても、事前に比して事後は、12 のすべての要素で増加していることを確認した。このような結果に繋がった要因について、本プロジェクトの活動から考えてみたい。

①中学生との共同活動

本プロジェクトは、今金町の中学生と学生が協議し、地域の活性化方策を提案する活動である。特に、学生には、中学生のアイディアを具体化するためのファシリテーターとしての役割を強く求めた。こうした活動が、日ごろの学内での学びを生かした学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）としての有効性とともに、展開方法について検討するための資料を得ることを目的として、1 年間にわたり取り組みを展開した。

アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）が発表した研究結果に、異なる学習方法による学習定着率を表す「ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）」がある。「講義・聞く（Lecture）」は 5%、「資料や書籍を読むこと（Reading）」は 10%、「視聴覚・見る（Audiovisual）」が 20%、「実演によるデモンストレーションを見る（Demonstration）」が 30%、「グループディスカッション（Discussion Group）」が 50%、「実践による経験・体験・練習（Practice Doing）」が 75%、「他者に教えること（Teaching Others）」が 90%である。より能動的・主体的な学習方法が学習定着率も高く、教育効果が高いことを示している。学習定着率の指標となるラーニングピラミッドでは、他者との関わり合いや、自らの実践経験が豊富になるほどに定着率が高くなるという傾向がみられる。「講義・聞く（Lecture）」から「実演によるデモンストレーションを見る（Demonstration）」までが 30%であることから、残りの 70%は行動して実践してみることや、他者の存在が重要になることがわかる。



（図-7）ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）　出典：Open educational resources（OER）

プロジェクトの活動をふりかえると、第1回（7月16～17日）では、美利河地区の現状及び問題の把握をするため、テーマ別チーム毎に美利河在住者のガイドによりフィールドワークを実施した。続く第2回（9月16～17日）では、第1回のフィールドワークで得たデータを踏まえ、課題と解決方策についてテーマ別にグループ協議を行った。そして、第3回（11月3-4日）の成果報告会では、提案書を作成し、プレゼンの準備を行い、「町民文化祭」の中で活動成果を発表した。活動の中心となる学習方法は、主にラーニングピラミッドの「グループディスカッション（50%）」、「実践による経験・体験・練習（75%）」、「他者に教えること（90%）」の3つが中心となっている。とりわけ、中学生との共同活動であったことは、中学生の考えやアイディアをカタチにするファシリテーターとしての役割が求められ、日ごろの大学の授業とは違い、他者（中学生）に教えるという場面が随所に見ることができた。こうした中学生への教えるという活動によって、大学での学びが学生に如何に定着したか否かの検証には至っていないが、大学での学びを活用することができたということは、今後の学習への意欲喚起に繋がるのではないかと期待する。また、学生が大学で学んだこと(インプット)を、他者に教える（アウトプット）という学習方法を展開することができるのは、地域連携を基盤とした学外での取組であること故の成果といえるのではないかと考える。アウトプットの機会を積極的に提供することが、学内での学びの充実のためにも必要なことである。

②現場でのリアルな学び

今金町美利河地区という特定地域をフィールドとして、そこに住む町民の方々から現状や課題を把握し、中学生のアイディアを形にする活動は、多様な世代や多様な価値観を持つ人との関係性を築き、合意形成していく過程に他ならない。

文部科学省の設置するコミュニケーション教育推進会議は、国際化の進展に伴い、多様な価値観を持つ人々と協力、協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成することの重要性を踏まえ、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及の在り方について議論を行い、平成23年8月に審議経過報告を取りまとめた。この中では、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と捉え、多文化共生時代の21世紀においては、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要であると報告している。また、経団連が企業の大卒等新卒者の採用選考活動を総括することを目的として1997年から実施している「2017年度新卒採用に関するアンケート調査」によると、採用選考にあたって特に重視した点（20項目から上位5つを選択）で最も多かったのは「コミュニケーション能力」で、15年連続で第1位となった。学生にとって必要なこうした能力は、学内の授業で行われる同世代のグループワーク等の協議において、身につけることは至難であると言わざるを得ない。多様な世代や多様な価値観に触れることのできる現場でのリアルな学習機会を提供できることは、地域連携によるプロジェクトの大きな利点と言える。

佐久間　章（スポーツビジネス学科）

２　学科の学びと能動的学修の展開

（1）交流チーム（観光学部観光ビジネス学科）

1）観光ビジネス学科の学び

観光ビジネス学科では、豊かな教養ともてなしの姿勢を培い、観光ビジネスについての専門的、実践的な知識を修得し、観光ビジネス分野で活躍する人材の育成を目的とした学びの体系がつくられている。なかでも、演習、実習、インターンシップ等を通じた実践的・体験的な学びを重視し、能動的・自主的な学修の充実を図っている。

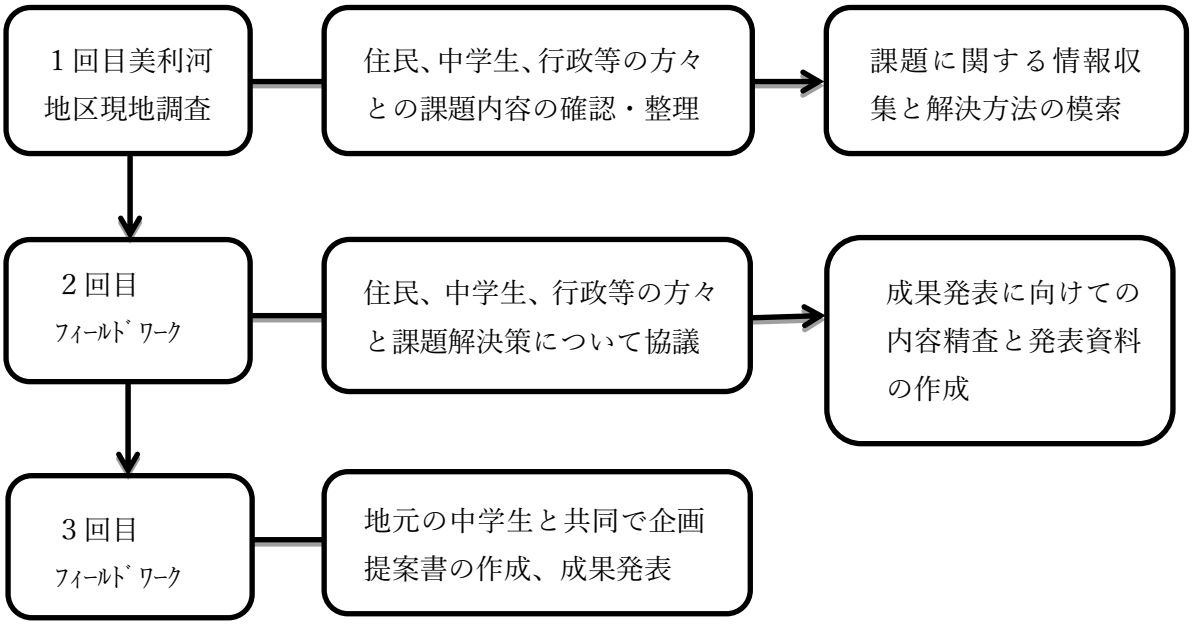
2017 年度の今金プロジェクトに参加した学生は観光ビジネス学科の 3 年生 4 名であるが、彼らはこうした教育目標ならびに教育課程に基づく学びを実践してきた。

2）交流チームの課題と課題解決に向けてのアプローチ

今年度の今金プロジェクトのなかで、交流チームに与えられた課題は、以下のとおりである。

「北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致および交流人口を増やすための今金町の玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。」

上記の課題解決に向けて、チームのメンバーが取り組んだ経過を以下に記す。



① 1回目美利河地区現地調査

1回目の現地調査は、対象地域の美利河地区をその地域に居住する人たち、町立中学校の生徒たち、行政や商工会など多世代、さまざまな立場の方たちと一緒に行われた。主要な視点は、今金町の玄関口としての美利河地区がどのような地域なのか、そして観光の視点からどのような課題があるのかというものであった。調査は、ピリカ旧石器文化館、美利河ダム、美利河スキー場、クアプラザピリカ、奥美利河温泉など美利河地区にある主要な施設の見学が中心であった。

見学後の意見交換を経て、観光客の誘致に向けた観光対象を美利河スキー場および宿泊施設クアプラザ美利河に絞ることとした。大学に戻ったあと、2回目のフィールドワークに向けてチームの学生メンバーたちは課題内容の整理と課題解決の方策検討に必要な情報収集を行った。

■個別課題に関連する検討データ・資料

□北海道新幹線の効果

「北海道新幹線の経済的効果」（日本銀行函館支店）

http://www3.boj.or.jp/hakodate/kouen/siryou/kouen281219sinkansen.pdf#search

「北海道新幹線開業で道南の観光客が大幅増」（観光経済新聞）

http://www.kankokeizai.com/

「新幹線効果は1年、函館だけ？　北海道で開業半年」（朝日新聞）

http://www.asahi.com/articles/ASJ9Q6JTRJ9QIIPE01S.html

□美利河スキー場の再生

「スキー場の活性化の取組み事例集」

https://wwwtb.mlit.go.jp/hokushin/hrt54/railroad/skizyoukasseika.html（国土交通省）

□奥美利河温泉「山の家」の存廃

「山間温泉地における小規模旅館の経営動向」

http://library.tourism.ac.jp/no.1TatsuoUra.pdf#search

□美利河ダムの利活用

「ダムツーリズム　－観光資源としてのダム」

http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/Konogoro.cgi?id=440

□旧石器文化館の魅力発信

「観光資源としての博物館」

http://www.soc.titech.ac.jp/publication/Theses2011/graduate/07_09715.pdf#search

□観光情報の提供

「観光地が取り組む効果的な観光情報提供のための資料集」

http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kankojoho/all.pdf（国土交通省）

② 2回目フィールドワーク

グループワークは、美利河地区の住民の方々、町立中学校の生徒たち、そして役場や商工会の方々と学生たちとで、1回目のフィールドワークで行われた現地調査の結果を共有するところから始められた。課題の確認のあと、成果発表に向けての内容精査と発表資料の作成に移った。最終の成果発表は2名の中学生が行うことになっており、グループ内での協議はそれを前提として進められた。

グループワークでは学生たちが先導的な役割を担ったが、そこでは常に中学生たちの思いや理解を確認するように配慮された。最終発表のポスターセッション用テンプレートに入力しながら内容を整理し、プレゼン用の発表原稿の作成も同時に行われた。

③ ３回目のフィールドワーク

１日目には、企画提案書の最終確認と発表原稿の作成など成果発表のプレゼンテーションに向けての準備を行った。終盤にはリハーサルも行われた。２日目は、発表会場で中学生２名が中心となり、大学生４名がサポートする形で成果発表が行われた（写真）。

３）能動的学修の展開とその成果

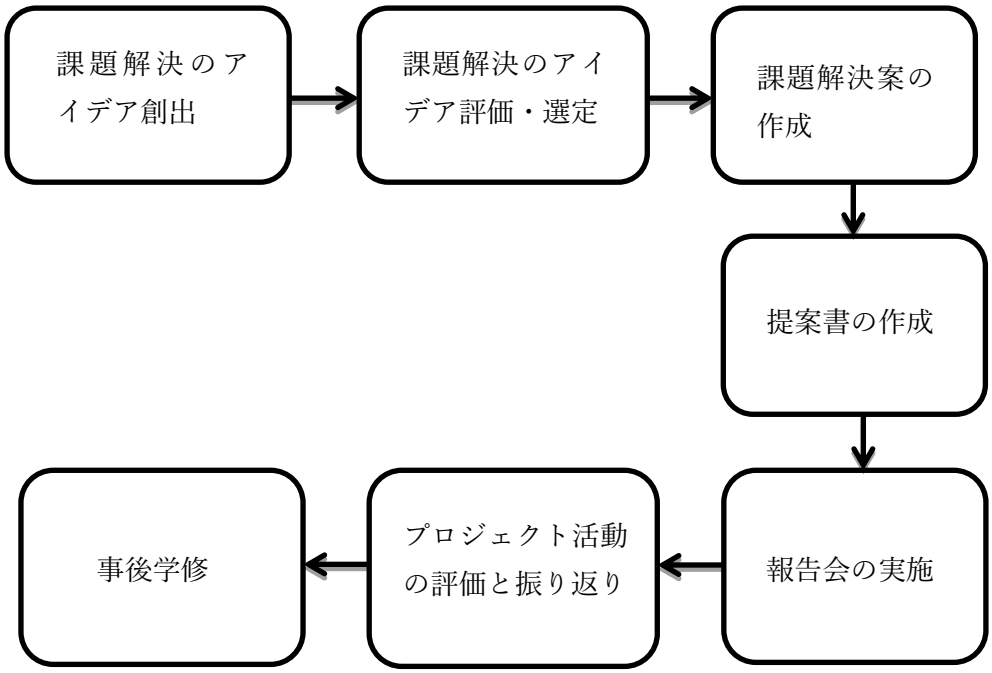
今回の今金プロジェクトは、「住民との協働による能動的学修の展開」という枠組みの中で計画され、実施された。

大学における能動的学修は、学生が主体的に問題を発見し、解を見出していくものとされ、アクティブラーニングともよばれる。学生の主体的な学びの確立は、学生の課題探求能力、すなわちどのような環境でも「答えのない問題」に最善解を導くことができる力を養うことにその意義があるとされる。前述の経済産業省が提唱する社会人基礎力ともつながる、“相手の立場に立って理解する”、“主体的に物事を考える”、“自分の考えをわかりやすく伝える”そして“新しい価値を生み出す”ことのできる人材育成にも通底したものである。

能動的な学修を実現していくためには、学修者自身がさまざまな学びの技法を身につけておく必要がある。代表的なものとして、「情報収集と情報整理の技法」「教え教えられる技法」「協働・創造の技法」などがある。具体的には以下のとおりであり、今回のプロジェクトではすべての技法が活かされた。

情報収集と情報整理の技法…新聞・雑誌、書籍の利用
インターネットの活用
インタビュー
教え教えられる技法　…レジュメやパワーポイントの作成
ワークシートの活用
協働・創造の技法　…ブレーンストーミング
ワークショップ

今回のプロジェクトで実施された３回のフィールドワークは、下図にある体験学修のプロセスによって構成された。



能動的学修の成果は、いくつかの視点から評価することが必要となるが、以下の２つの視点を取り上げる（いずれも、『能動的学修の教員研修リーダー講座テキスト』（全国大学実務教育協会）による)。まずは、今回のプロジェクトの主要な観点である課題解決学習としての評価である。

実施ポイントにもとづく評価

実施ポイント	評価内容	チームの評価
テーマの設定	テーマの設定は良かったか、それは実現したか	◎
チームの編成	チーム編成はうまくいったか	○
資料の作成	資料作成はどうであったか	◎
活動の経過	活動内容はどうであったか	○
リフレクション	リフレクションはできたか	○
ファシリテーター	ファシリテーターは機能したか	○
活動成果	成果は上がったか	◎

◎かなりできた　　○まあまあできた　　△できなかった

チーム全体として、テーマの設定、それに基づく資料作成、活動成果自体については十分に評価できるものであった。構成メンバーが常に一定でなかったため、活動内容を共有することが必ずしも十分とは言えず、また、その都度振り返り、あらたな活動に活かすという点においては課題が残った。

さらに、能動的学修は主体性をもって学ぶことを最も大切にしていることから、その評価は自己評価が基本となる。どのような能力を養うために能動的学習を行うのか、目標を明確にしたときに評価項目が決まるとされる。下表は能力開発にもとづく評価項目であるが、前述の参加学生による社会人基礎力の変化に関する結果によって、このことについて多くの示唆が得られている。

能力開発にもとづく評価

能力要素	評価内容
コミュニケーション力	活動によってコミュニケーション力は向上したか
プレゼンテーション力	活動によってプレゼンテーション力は向上したか
協働能力	活動によって協働能力は向上したか
リーダーシップ力	活動によってリーダーシップ力は向上したか
フォロワーシップ力	活動によってフォロワーシッップ力は向上したか
ネットワーク力	活動によってネットワーク力は向上したか
コンセンサス力	活動によってコンセンサス力が向上したか
調査力	活動によって調査力は向上したか
分析力	活動によって分析力は向上したか
課題解決力	活動によって課題解決力は向上したか
発想力	活動によって発想力は向上したか

丹治和典（観光ビジネス学科）、千葉里美（観光ビジネス学科）

（２）健康チーム（スポーツ人間学部スポーツ指導学科）

①スポーツ指導学科の学び

本学のスポーツ指導学科は、「生涯スポーツの育成発展に努めながら、スポーツを通して地域社会に貢献できる教養豊かなスポーツ指導者を育成する」という受け入れ方針の下、スポーツを通して地域を活性化できる指導者の育成を目指している。そのため、講義での専門的知識を身につけるとともに、フィールドワークやボランティア活動に積極的な参加をすることで、現場で実践的に学ぶことを奨励している。そういう意味においては「今金プロジェクト」に関わることは、学科の目的そのものであり、今回のように中学生と一緒に取り組むことは、より一層の効果が期待できる学習機会である。

健康チームはスポーツ指導学科の教員２名（男女各１名)、３年生３名（男子２名、女子１名）に今金中学校の男子生徒２名（３年、２年各１名）の７名体制で「高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する」というテーマで今回のプロジェクトに臨んだ。

学内における事前の打ち合わせでは、教員が主となるのではなく学生の取り組み、意欲を最大限に生かせるようにするとともに、今金町の方々、特に中学生の考え、発想を客観的に受け入れ、実現可能な提案をするということを確認した。

②実践の足跡

第１回目（7 月 16～17 日）のフィールドワークでは、今金町を知ること、中学生を主に今金町の方々とコミュニケーションを深めることを目的に臨んだ。幸いに、健康チームに配属された２名の中学生は、学生とすぐに打ち解けることができ、積極的に自分たちの意見を話してくれた。また、サポート役として助言をいただいた町民の方々も、今回のプロジェクトの趣旨に理解を示してくれている方々ばかりで、学生や中学生の意見を否定することなく、温かく支援してくれた。

１日目は美利河交流センターで行われた全体会においてアイスブレイクを担当した。学生３名は、レクリエーション・インストラクター資格を取得できる授業を受講しており、授業での学びを活かし全体の雰囲気を和ませた。また、チームごとに協力できるゲームを実践し、チーム内での交流を深めることができた。特に今金町のイメージキャラクターである「いまルン」を描くゲームは、町民の方々にも好評であった。学生は、日ごろの授業の成果を活かすことができ、自分達が予想した以上の反応に自信を深めた。その後、今金町美利河地区にあるピリカ旧石器文化館、美利河ダム、奥美利河温泉跡などを見学し、2 日目のフィールドワークの計画を立てることとなったが、健康チームとしては美利河ダムを１周しながら、ダムを活用したイベントの可能性について探ることとなった。

写真１　学生によるアイスブレイク

写真２　奥美利河温泉跡

２日目は、１日目の計画通り美利河ダム周辺１周しながら、中学生や町民の方々と美利河地区の歴史や現在行われているイベト等、前日の会議では聞けなかった本音の部分まで聞くことができた。また、前日の計画にはなかったカヌーの話しに学生及び中学生が強い興味を示し、実際に体験もすることが出来た。このカヌー体験がその後のプロジェクトに与えた影響は大きい。計画通り進めることが基本ではあるが、主体となる中学生の意見を臨機応変に取り入れたことにより、学生を含めてその後の行動がより積極的になった。美利河ダム周辺には多くの資源があり、それを活用した健康増進方策を中学生及び町民の方々の意見を参考に大学に戻ってまとめることとなった。

写真３　カヌー体験

第２回目（9 月 16～17 日）のフィールドワークは、１回目のフィールドワークで調べた美利河地区の魅力を発信する方策について、個々の意見を付箋に書いたものを出し合うＫＪ法で「健康チーム」内の意見をまとめることから始まった。前回同様、学生が進行役となり進めたが、２回目ともなるとコミュニケーションもとれており、積極的な意見交換が進んだ。また、１回目にサポートをいただいた町民の方も一部参加し、中学生の意見を尊重する中で、地元の方ならではの助言もいただき、和やかな雰囲気の中スムーズに進めることができた。

写真４　KJ 法による意見のまとめ

今回は宿泊も自炊であることから、調整チームと町の職員さんが作ってくれたおいしい今金カレーを食べながらコミュニケーションを深めることができた。

２日目は、前日まとめたことをどのように提案していくかを協議した。この日はサポート役の町民の方は参加せず、初めて大学生と中学生だけで進めることとなったが、ここでも中学生２名の積極的な姿勢は衰えることがなく、ファシリテーター役の大学生が圧倒されるくらい活発な意見交換が行われ、健康チームとして「ピリカスロン」「ピリカマルシェ」「水上ライブ」「ウォールアート」等のイベントに運営ボランティアとして協力し、参加者に対して笑顔で支援することによって、精神的、社会的に健康な人間関係を築く「ピリカ型健康法」を提案することが決まった。また、発表に向けてのパワーポイント作りまで、一部進めることができた。

第３回目（11 月３日～4 日）の１日目は、チーム別での打ち合わせや発表リハーサル等を行った。学生はある程度の発表内容を集約し、自分たちなりのプレゼンテーションは準備していたが、それをあえて封印し、パワーポイントの内容と発表のポイントだけを共有し、中学生がイメージしやすいようにした。その後中学生 2 名が自分達の言葉で発表の仕方を考え、パワーポイントも見やすいように修正し、最終的には大学生の助言等聞きながら何度も繰り返し練習を行った。後半の発表リハーサルでは、本番さながら自分達の思いを堂々と表現をしていた。

写真５　中学生による発表の考案

２日目は、町民文化祭にて活動成果報告会が行われた。中学生の保護者や友達、中学校の教員を含む多くの町民に見守られ、少し緊張していた様子であったが、前日のリハーサル後もそれぞれ練習してきたと思われる。新たな説明も加えて自分達の言葉で堂々と発表することができた。

学生が用意した原稿を読むのではなく、中学生自らが考え、自らの言葉で伝えたことが町民からも講評をいただき、活動成果報告会が終了した。

③能動的学修の効果

能動的学修とは、教師が一方的に授業するのではなく、学生（生徒）自らが学習に取り組む授業、体験学習、調査学習、問題解決学習、グループディスカッション等の学習方法のことを示し、今回の今金プロジェクトは正に、能動的学修そのものと言える。

今回の今金プロジェクトを通して健康チームは、学科の目的でもある地域を活性化できる指導者として実践的な学びの場を体験することができた。特にアイスブレイクにおいては、初めて顔を合わせる一般の方々や中学生という異年齢集団をリードし、笑顔でコミュニケーションを図ることができたことは、日ごろの授業で得た知識や技術を実践できる貴重な体験であった。また、中学生の考えを引き出しまとめあげるという体験は、そう簡単に経験できるものではなく、今回のプロジェクトに参加した意義は大きい。事前の学習でも確認したように、自分達の思いを伝える指導にはならないよう、できるだけ具体的なものは用意せず、中学生の思いをまとめ、形にしてくことに徹したここが、中学生の積極的な姿勢を向上させ、それを理解していただいた町民の方々の支援があったからこそと感謝している。今回の取り組みが少しでも今金町の活性化に寄与することができれば幸いである。

最後に、私たち教員も今回のプロジェクトを通して、町民の温かいご指導のもと学生自らが能動的に取り組み、成長を感じることができたことにお礼を申し上げる。

写真６　活動成果報告

写真７　発表後の記念

新井貢（スポーツ指導学科）、本多理紗（スポーツ指導学科）

（3）歴史チーム（人文学部現代文化学科）

① 全体目的と歴史チームの課題

今金町美利河地区をフィールドとし、「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題について多世代の町民と協議し、解決方策の検討・提案を行うプロジェクトを通して、学生が主体的に問題を発見し解決方策を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）による事業展開を検討することを目標とし、現代文化学科では「歴史」をテーマに今金町美利河地区の歴史文化資源の保護・活用・伝承方法について、住民との話合いを行いながら、その問題点の整理をはかり、歴史文化の発信のための具体的施策について考えた。

② 歴史文化資源の活用と能動的学修

地域コミュニティの歴史は、地域がどのように生まれ、現在に至るかを物語る、思い出、誇りといった精神的アイデンティティであり、地域コミュニティの核の 1 つと言える。

またこの精神的アイデンティティの継承は、地域コミュニティを維持、結束させるために非常に重要である。

しかしながら、過疎化、高齢化、若者の減少などから地域の歴史－精神的アイデンティティを継承する担い手不足が深刻化し、地域においても自分たちの歴史をまったく知らないという人々が増え、今日ではある意味地域コミュニティが消滅危機になっているといっても過言ではない状況が見られる。さらに行政も人手不足や財政難でこれらの危機を食い止ることが困難な現状である。

こうした地域が抱える問題を解決する方法として、第三者の力（民間、教育機関など）が求められ、特に大学などの教育機関では、地域が抱える問題解決を学生の教育の場としてとらえる試みがおこなわれている。

問題解決をおこなうためには、主体的（能動的）に取り組む姿勢が重要であり、さらに近年、大学においては社会において仕事を行うために必要な基礎的能力として経済産業省が提唱した「社会人基礎力」を身につける教育がおこなわれている。「社会人基礎力」は、前に踏み出す力（主体性、働きかける力、実行力）、考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）、チームで働く力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、ストレスコントロール力、規律性）の 3 つの能力、12 の能力要素で構成されている。こうした主体的な学びとともに社会人基礎力を身に付ける実践の場として地域社会における活動が多くの大学で活発におこなわれている。

本プロジェクトにおいては、こうした能力を身につけるために今金町美利河地区をフィールドワークの現場とし、現地調査、地域住民との話合い、成果報告をおこなった。その内容は以下の通りである。

◇事前学習

全体の目的やテーマに関する説明をおこなった。特に歴史チームは、歴史資源の活用、保護、伝承方法をテーマとしているため、ある程度の事前勉強が必要と考えたが、全体の方向性が「まっさらな状態から考える」ということだったため、特に事前学習の指示をしなかった。

◇第１回美利河地区の現状及び問題の把握(今金町)　効果：問題意識を高める（主体性）

１回目は　７月 16 日(日)・17 日（月）の２日間でおこなわれ、主に美利河地区の現状及び問題の把握を目的に、テーマ別グループ毎に地域住民と一緒にフィールドワーク を実施した。

【フィールドワーク内容】

ピリカ旧石器文化館（石器、発掘現場、トウヒなど)、郷土資料室（旧町内写真、マンガン鉱山関連資料、トロッコ、ピリカ海牛など)、ピリカダム（日本一長い堰堤、排水施設、魚道、ダム事務所とダムカード)、砂金採掘跡、ピリカ海牛出土地点、マンガン鉱跡、クアプラザピリカ、スキー場、キャンプ場、メノウ集石場、ピリカ小学校跡、奥美利河温泉、国鉄瀬棚線跡

ピリカ旧石器文化館

ピリカ海牛

メノウ集石場

ピリカダム

砂金採掘跡

マンガン鉱跡

7 月 16 日、17 日の 2 日間では、美利河地区の歴史文化資源の現状を確認するため、地域住民とともにフィールドワークをおこなった。美利河地区の歴史を伝える資料館であるピリカ旧石器文化館には、ピリカ海牛、鉱山資源の採掘の歴史や採掘に使った道具、旧石器時代の遺跡やそこから出土した石器などが展示されていた。ここで美利河地区全体の歴史を確認し、さらに砂金採掘跡、マンガン鉱跡など、貴重な鉱物資源の跡地を見学し、その現状を確認した。

この現地調査は、あらかじめ今金町や教員によって決まられていたが、全体の目標とテーマは事前学習で理解していたため、主体的に問題意識を持って見学することができた。

◇第 2 回協議に関する事前学習（整理、分析）　　効果：課題発見力など

第 1 回の現地調査で確認したことを大学で整理し、理解したこと、問題点を自分たちなりにまとめた。また今金町のご厚意で寄贈していただいた町史、借用したピリカダムの写真集などの書籍類を使い、自分たちで確認した現状と町の歴史について自己・グループ学習を通じて、問題点をより明確にまとめられ、第 2 回目の目標、協議の進め方などを確認することができた。

◇第 2 回課題と解決方法について協議(今金町)　効果：チームワークの重要性（発信力、傾聴力など）

2 回目は 9 月 16 日（土)・17 日（日）におこなわれ、前回実施したフィールドワークを整理し、課題と解決方策についての協議を地域住民と一緒におこなった。

協議では大学生がファシリテーターとなり①美利河にある歴史・文化的なもの、②問題点などを付箋を使い、自由にあげてもらい、それらを分類・整理し、問題点を明確化した。明確化された問題点をもとに、③具体的解決策を自由に議論してもらい、それらをまとめた。

大学生の役割は、自由に発言させる雰囲気づくりやきっかけづくり、方向性をまとめることなどであったが、最初はなかなかうまくいかず、教員が何度か会話に参加した。住民の方が手助けをしてくれたおかげで、学生にも余裕が生まれ、最終的には学生が主体となって協議を進めることができた。

【協議内容】

＊第 1 回に見学した内容の整理

・美利河の魅力は何か？それを伝えられる場所は？

・美利河地区の歴史が知られていない。⇒　どうしたら伝えられるか

・対象とする方々はまず町民の方々、特に小学生・中学生

＊提案内容の検討

フットパス：スタンプラリー

「歩いて学ぼうピリカの歴史」をタイトルにする

・コースの設定＝スタンプを置く場所、そこでのクイズ

ピリカ海牛発見場所、旧石器文化館、マンガン鉱入口付近、砂金採掘遺構、ピリカダム

・写真を撮って SNS で発信してもらう

※クアプラザの活用：マップ台紙の配布地点、景品の手渡し　⇒　温泉の活用

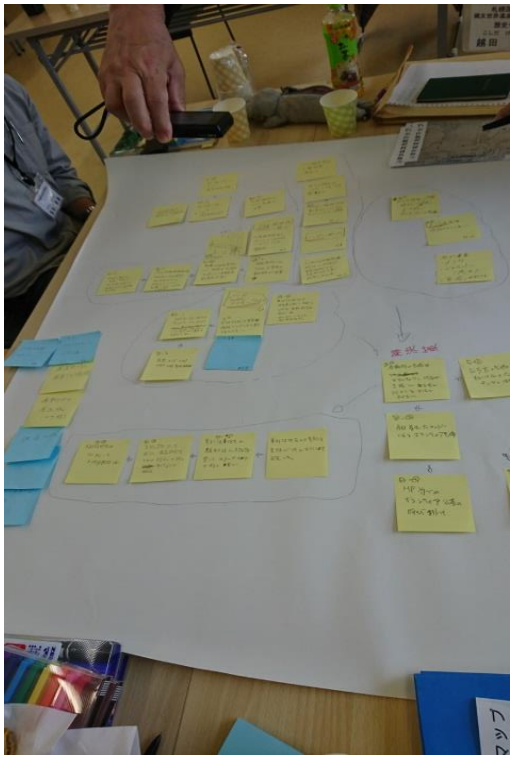
＊期待される効果

・町民の方々に美利河地区の歴史を伝えるとともに、地区の抱えている問題点も知ってもらう

・地元の中学生と共にこの問題を考えることができる

・さらに地元の方々にも話を聞いて、地域の歴史に興味を持てる

・町内の方々が美利河地区の歴史をより深く知り、今金や美利河地区の歴史を町外に発信するきっかけとする



中学生・地域住民との協議の様子

◇第３回企画提案書の作成、プレゼン準備、発表会(今金町)効果：実行力、計画力、チームワークなど

第３回目は 11 月４日（土)・５日（日）に実施された。

２回目の協議でまとめた内容をもとに、大学において大学生中心にパワーポイント、発表原稿を作り、中学生とともに最後の調整、発表練習をおこなった。そして５日に、町民文化祭で発表をおこなった。

提案内容は、２回目の協議でまとまった事項をもとに、作成をおこなった。

２回目の協議でわかったことは、「美利河地区の歴史が深く知られていない」という問題であった。その原因として、①郷土の歴史教育の継続がない、②歴史に関わる人が少ない(ボランティア不足)が考えられた。そのため、歴史をより多くの人々(特に町民)に知ってもらうため、歴史を絡めたスタンプラリーを作成し、実際に歩きながら歴史を体感してもらうという提案をすることになった。

そのためのマップ作り(マップ案)、対象者の設定、スタンプの設置場所等の枠組みを考えた。さらにマップによる効果として、マップ作りを町民との共同作業で行うことも提案された。

これらの取組により、郷土の歴史教育の補完さらにスタンプラリー実施で町民はもちろん、今金町、美利河地区の歴史に興味を持つ人の増加が期待され、さらにより多くの人に発信する美利河地区の魅力を発信することができるという結論に達した。

発表の様子

発表のテーマ

③　まとめ–歴史文化資源の活用に必要なものとは

今回歴史チームで行った歴史文化資源の活用を地域住民とともに考える際に、チームで働く力–「発信力」や「傾聴力」などが非常に重要であることがわかった。地域の歴史は人が作り出したものであり、歴史の担い手である地域住民と話をし、ともに考えることが、歴史文化資源の活用を考えるために最も必要なことであるからである。さらにこうした調査には地域住民との円滑な関係性が求められ、他者への配慮、組織への配慮が自然に必要になる。対人関係を保ちながら、活性化を図るためにはコミュニケーションの向上が技術的に求められるとされている。その技術には「対話」と「省察」が重要であり、これらを繰り返し行うことで問題解決に向けての円滑な関係性が構築されていく（樋口・保井　2017)。今回の調査・協議においては、この「対話」と「省察」が歴史文化資源の活用という問題をテーマにおこなわれ、解決策にはまだ具体性が欠けるものの、プロジェクトを実行するうえで必要なもの、自分に不足している能力を理解するなど一定の成果を得たと思われる。また教員にとっても学生が主体的（能動的）に学ぶように働きかける難しさなどを改めて感じ、その方法について学ぶことが多かった。

今後もこうしたプロジェクトを通じて、歴史文化資源の活用に必要なコミュニケーションの向上を目指し、地域コミュニティの歴史を発信する活動を行っていきたいと考える。

引用・参考文献

鈴木敏恵　2012『プロジェクト学習の基本と手法』教育出版

樋口邦文・保井美樹　2017『学びの場が育てる地域創生』水曜社

坂梨夏代(人文学部現代文化学科)、越田賢一郎(縄文世界遺産研究室)

今金町美利河の歴史に関するまとめ

1　今金町の特徴

（1）海のない町　渡島・檜山地区では、厚沢部町と二カ所だけ

＊太平洋と日本海を結ぶルートとしての重要性

（2）漁業に代わる産業は

農業　＊厚沢部町のメイクインと今金町のダンシャクイモが象徴する

鉱業　　金山、マンガン鉱、メノウ、ドロマイトなど

＊旧石器時代にも頁岩、メノウが利用される

＊砂金掘りが古い時期からはいりこむ

（3）ピリカダム

利別川の日本一の清流と豊かな水の活用

農業用水、洪水防止のための役割：本町地区の洪水の歴史

2　美利河地区の歴史

（1）ダム建設前とそれ以降との区分

①明治前

・ピリカ海牛：海の時代の今金

・美利河遺跡：最初に今金地区に住んだ人々

・砂金掘り

②明治以降（ダム建設前）

・今金町の開拓

・美利河地区の開拓とマンガン鉱山

・メノウの産出

・瀬棚線の開通と強制労働

・戦後の奥美利河温泉の開発

③戦後（ダムの建設と新しいまちつくり）

・ダム建設にかかわって旧市街地の移転

・工事に伴う、ピリカ遺跡の発掘

・砂金採掘跡の調査

・ピリカ海牛の発見

・クアプラザピリカ、スキー場、サーキット場等の建設：新しい美利河の姿

④過疎化の波

・人口減少　小学校の閉校

・高齢化

⑤美利河地区の活性化

・美しい自然、温泉

・地域の歴史の活用

・地域の良さの再評価　ダム、様々な施設の利用

・新しい美利河村作りへ 子供たち、地域の方々、学生の協力

平成 29（2017）年度　奨励研究

学科の学びを活用する能動的学修の展開
～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

事業報告書

平成 30 年 3 月

札幌国際大学
〒004-8602　札幌市清田区清田４条１丁目 4-1
TEL　011-881-8844